

# 大田市松田谷横穴群



82

育委員会

## 例　　言

1. 本書は1979年6月4日～同年10月31日の間、島根県（農林水産部 農業技術センター）から委託をうけて島根県教育委員会が実施した、島根県立農業大学校予定地内における埋蔵文化財調査報告書である。
2. 調査場所は島根県大田市波根町970番地1他である。
3. 調査は次のような組織、構成で行なった。

調査員 石井 悠（島根県教育委員会文化課文化財保護主事：調査時、以下同じ）

勝部 昭（同文化課係長）、西尾克己（同文化課主事）

大國晴雄（大田市役所税務課主事）、田根裕美子（文化課嘱託）

作業員及び 石橋剛之、松本隆司、渡辺治美、下垣兵三、黒河邦之、川崎加奈子、

協力者 和田伸子、村上紀美子、小原明美、田中純一、渡 吉正、板木三穂子

4. 調査及び整理にあたっては以下の諸機関、諸氏に多大なる御協力、御援助を賜った。  
大田市、大田市土地開発公社、大田市森林組合、大田市立図書館、大田市教育委員会、  
大田市勤労青少年ホーム、大田市隣保館  
福田宏江、㈱青木組、㈱日本道路、建設省出雲維持事務所
5. 本書の執筆・編集は主として大國晴雄が行ない、勝部 昭の協力を得た。また1969年、  
国道9号線バイパス工事に伴って調査された横穴についても『島根県埋蔵文化財調査報告』  
第II集の報告文と原図（県教委保管）により併せて報告した。
6. 掲載図・写真等は調査時に作成・撮影したものであるが、一部については関係機関の承  
諾を得て転載させていただいた。なお、実測図の方向は調査時における磁北である。  
また、横穴実測図中の遺物番号は、遺物実測図の番号と一致する。
7. 出土遺物は大田市教育委員会に保管されている。

## 目 次

|                       |    |
|-----------------------|----|
| I、調査にいたる経過 .....      | 1  |
| II、遺跡の地理的、歴史的環境 ..... | 3  |
| III、横穴群の概要 .....      | 6  |
| I群 .....              | 7  |
| II群 .....             | 11 |
| III群 .....            | 26 |
| IV群 .....             | 30 |
| (付) 表面採集された遺物 .....   | 31 |
| IV、小 結 .....          | 33 |

## 図 版 目 次

|                             |    |                               |    |
|-----------------------------|----|-------------------------------|----|
| 図 1. 調査区設定図 .....           | 1  | 図 16. II群 4号穴出土遺物実測図(2) ..... | 18 |
| 2. 周辺の遺跡分布図 .....           | 5  | 17. II群 5号穴実測図 .....          | 19 |
| 3. 横穴群分布図 .....             | 6  | 18. II群 5号穴出土遺物実測図 .....      | 20 |
| 4. I群 1号穴実測図 .....          | 8  | 19. II群 6号穴実測図 .....          | 21 |
| 5. I群 2号穴実測図 .....          | 8  | 20. II群 6号穴出土遺物実測図 .....      | 22 |
| 6. I群 3号穴実測図 .....          | 9  | 21. II群 7号穴出土遺物実測図 .....      | 23 |
| 7. I群 4号穴実測図 .....          | 9  | 22. II群 7号穴実測図 .....          | 24 |
| 8. I群 5号穴実測図 .....          | 10 | 23. 耳環・玉類実測図 .....            | 25 |
| 9. II群 1号穴出土遺物実測図 .....     | 11 | 24. III群 1号穴実測図 .....         | 27 |
| 10. II群 1号穴実測図 .....        | 12 | 25. III群 1号穴出土遺物実測図(1) .....  | 28 |
| 11. II群 2号穴実測図 .....        | 13 | 26. III群 1号穴出土遺物実測図(2) .....  | 29 |
| 12. II群 3号穴出土遺物実測図 .....    | 14 | 27. III群 2号穴実測図 .....         | 30 |
| 13. II群 3号穴実測図 .....        | 15 | 28. IV群 1号穴実測図 .....          | 31 |
| 14. II群 4号穴実測図 .....        | 16 | 29. 表面採集遺物実測図 .....           | 32 |
| 15. II群 4号穴出土遺物実測図(1) ..... | 17 |                               |    |

## I 調査にいたる経過

1979年大田市波根町に島根県立農業大学校建設計画が具体化した。ところが、ちょうどその予定地に古代石見国では浜田市下府町の下府廃寺、那賀郡旭町の重富廃寺とともに私寺と考えられる天王平廃寺が所在するとみられたため、直接事業を担当する島根県農林水産部農業技術センターとその扱いについて昭和54年5月協議をした。そこで、天王平廃寺の範囲を確認することを第一とし、さらに広大な建設予定地であり、近くにある松田谷横穴群の他にも遺跡の存在する可能性があったので、急拠、部分的な発掘調査をして確かめることになった。何分にも急なことであったために、県文化課としては十分な調査対応ができず、大田市の格別の助力を得ることとなった。

調査は天王平廃寺の広がりと遺構の有無の確認のため農業大学校の建設されるところを中心にトレンチを設定し発掘した。その結果、相当な砂の堆積があり、数m掘っても地山面に到達できないところが多くかった。地山面に到達できた丘陵頂部やそれに近いところの場所については一部、土壌状のものなどが認められはしたが、時代を特定できる遺物などの資料はなかった。殊に、天王平廃寺に関係するものが存在するであろうと予想していたものの設定したトレンチの中には何らその形跡を認められなかった。

このため、農業大学校建設予定地内に存在する松田谷横穴群の取扱いをどうするかが焦点となり、文化財保護側は現状保存を希望した。しかし、最終的には事前調査もやむをえないということになり、松田谷横穴群の発掘調査を実施することとなった。暑い盛りで、現場作業は大変であったが、地元の方々の格別の御協力によって無事調査を終えることができた。



図1 調査区設定図（1～7：トレンチ、I～IV：横穴群）

## 調査日誌抄

1979年

|       |                             |       |                                  |
|-------|-----------------------------|-------|----------------------------------|
| 6月4日  | 試掘調査開始(Ⅰ区)                  | 7月31日 | 松の根を取り除くのに手間どる<br>Ⅲ群下段を掘下げるが横穴なし |
| 6月7日  | Ⅰ区でピット確認                    | 8月1日  | 酷暑、作業はかどらず                       |
| 6月26日 | 1～6区試掘調査終了<br>1区で土塙、ピットのみ検出 | 2日    | タ                                |
| 6月28日 | 松田谷横穴群の調査に入る<br>蝮出現、巣果2匹    | 8月20日 | Ⅱ群7号穴掘下げ                         |
| 7月2日  | Ⅱ群3～5号穴を併行して確認              | 8月27日 | Ⅱ群6号穴を検出                         |
| 7月3日  | Ⅱ群3～5号穴、遺物ほぼ判明              | 8月30日 | Ⅳ群1号穴掘下げ                         |
| 7月6日  | 作業員を増員する。                   | 9月3日  | Ⅱ群の全景写真を撮影                       |
| 7月8日  | Ⅰ群、Ⅲ群の立木を伐採、搬出              | 9月4日  | Ⅳ群1号穴周囲の掘下げ、確認                   |
| 7月13日 | Ⅱ群3号穴人骨の取上                  | 9月14日 | をして、現地作業を一応終了                    |
| 7月16日 | Ⅲ群1号穴を検出                    | 12月   | 現地補足調査を終わり、室内作業にとりかかる。           |
| 7月17日 | Ⅲ群2号穴を検出                    |       | 調査を終える。                          |

'69年調査と'79年調査横穴対照表

| 1979年調査No. | 1969年調査No. | 調査年 | 備考                   |
|------------|------------|-----|----------------------|
| I群1号穴      | 同左         | '69 | 長1.80m×幅1.96m×高0.86m |
| 2 "        | 同左         | "   | (0.74) × 2.30 × 1.05 |
| 3 "        | 同左         | "   | (2.07) × 2.03 × 1.00 |
| 4 "        | 同左         | "   | (2.00) × 2.30 × 1.25 |
| 5 "        | 同左         | '79 | 1.90 × 2.80 × 1.00   |
| II群1 "     | 同左         | '69 | 2.65 × 3.80 × 1.80   |
| 2 "        | 同左         | "   | 2.50 × 2.90 × 2.00   |
| 3 "        |            | '79 | 2.50 × 3.30 × 0.60   |
| 4 "        |            | "   | 2.00 × 2.90 × 1.10   |
| 5 "        |            | "   | 1.70 × 2.40 × 0.70   |
| 6 "        |            | "   | 2.10 × 2.30 × 0.95   |
| 7 "        | II群3号穴     | "   | 2.20 × 1.30 × 1.05   |
| III群1 "    |            | "   | 2.00 × 2.72 × 1.00   |
| 2 "        |            | "   | 1.70 × 0.60 × 1.20   |
| IV群1 "     | II群5号穴     | "   | (2.20) × 3.50 × 1.50 |
|            | II群4号穴     |     | 横穴と認められず             |

## II 遺跡の地理的・歴史的環境

島根県の中央、やや東に存在するこの松田谷横穴群は出雲と石見の境近くに存在している。

平野に乏しい石見部にあって、この一帯は数少ない平地の一つに数えることができ、そこには古くからの人々の営みが成立しうるような自然的条件がある。

むろん、日本海からの季節風は激しいが、海岸線に断続的に存する独立小丘陵はいくぶんかその風を防げ、その南側に集落を発達させている。

南に低丘陵を控え、大規模な河川のないこの一帯は、さらに戦後まで存在した波根湖によって、その可耕面積をいっそうせばめられている。

さて、近隣には縄文時代の遺跡は知られていない。僅かに日本海をのぞむ波根町灘山の丘陵上で黒曜石片が採集されているにすぎない。この時期の生活は、遺物の出土からするとむしろ三瓶山を中心とする山間部において多く営なまれたものと推せられるところである。

水稻耕作の始まった弥生時代になると、この平地部も活発化する。少し西になるが、長久町土江遺跡では前期前半の土器の出土が知られており、その後古墳時代に至るまでの遺物が断片的にではあるが知られ、この静間川流域における水稻耕作の開始を教えてくれる。また、鳥井町笠ヶ鼻では中期後半～後期初頭の土器が表採されて、この地においても生活が始まっていることがわかる。最近、長久町鶴山遺跡でも弥生土器が検出された。

しかし、東半部である波根・久手の一帯では現在のところ弥生時代の遺跡・遺物は発見されていない。しかし、波根湖と日本海の間に形成された砂丘は生活の場としては良好で、古墳時代の土器が多く出土しているところからみて、十分に遺跡の存在は予測しうるところである。

大きな社会の動きの中で成立した古墳時代、その前期前半に属する古墳はこの地域においては確認されていない。そして、この時期の遺跡、遺物もきわめて少量しか知られていない。

その中で僅かな例の一つとして、久手町大西地内出土の土師器壺があげられるのみである。また、久手町竹原の低丘陵の頂部に存在する竹原古墳（円墳・径約30m）が、いくぶん古い様相を示しているが、これもまたどの時期に築造されたものかは詳かでない。

ところが、古墳時代の後半になると、この地域では横穴・横穴群が爆発的に出現する。

この横穴・横穴群はその分布にも濃密があり、この久手・波根の南側丘陵地帯はその密集地の一つである。大半の横穴は古くから開口していて、遺物が明らかとなっているものは少ないが、調査されたものの中には鉄器や玉類をかなり副葬しているものもあって、かなりの階層にわたって横穴が築造されていることがわかり、横穴式石室がこの周囲にほとんど見あたらないこととも併せ興味深い。（注1）

また、横穴の中には整正家形や家型を意識したものもいくつか認められ、屍床をもつものの、棺台を持つものもあって豊富な形態をとっている。が主流となるのはこの地域の特質とされる床面正方形、平天井形式のもので、きわだつ集中をみせており、丸天井様のものを含めると、九割以上はこの形式の中におさまる。（注2）

この横穴の盛行以降、まず注目すべきものとして近接する天王平廃寺があげられる。部分的な発掘調査によって塔心礎、金堂基壇が検出され、なかでも塔心礎は円形方形二段の舍利孔をもつ大型のものであり、石見における三例の寺院のうちの一つとして注目され、また時期が奈良時代前半とされるところも、古い時期の寺院址として関心がもたれる。（注3）

奈良時代のこの周辺の様相は風土記の残る出雲国に比べ、詳かでないが、やや時代は下るが、『倭名類聚抄』には波禰郷、刺鹿郷の二郷が存在しており、横穴群が二大別できるとともに併せ、当時の村落をいくらかさし示しているといえる。

これ以降の遺跡、遺物は戦国期にまで下り、波根氏の朝日山城が東に、多胡氏の岩山城が西に存在したことが文献や城跡から知られる。

また、今回調査した横穴群中から出土した土師質土器（カワラケ）もほぼこの戦国期と考えられるところがある。

その後の大きな動きとしては、やはり昭和24年に行なわれた波根湖の干拓があげられ、自然的・社会的条件を大きく変えたことが推定される。

（注）

1. 『島根県埋蔵文化財調査報告』等Ⅱ集、島根県教育委員会、1970年
2. 「大田市内の遺跡遺物」（蓮岡法障『大田市誌』所収）大田市、1968年
3. 注1と同じ。

凡 例

- 遺物散布地
- 古墳（主体不明）
- 玄室（横穴式石室）
- △ 横穴・横穴群（■松田谷横穴群）
- ▲ 城 跡

日本海



図 2 周辺の遺跡分布図(1 : 10,000)

### III 横穴群の概要

横穴群は前回の調査分をあわせると4支群15穴を数えることができる。Ⅰ群は1～4号穴までが近接し、5号穴がいくぶん離れて位置する。南ないし南東に向いて開口する。Ⅱ群は1～5号穴が近接し、6、7号穴が低い位置にある。いずれも北ないし北西に開口する。Ⅲ群は2穴からなり、ほぼ南向きに開口する。Ⅳ群は1穴からなり独立的である。低い位置にあって南向きに開口する。調査した横穴は下図のような位置関係にあるが、これ以外にも若干存在した可能性がある。（特にⅣ群についてその可能性が強い。）

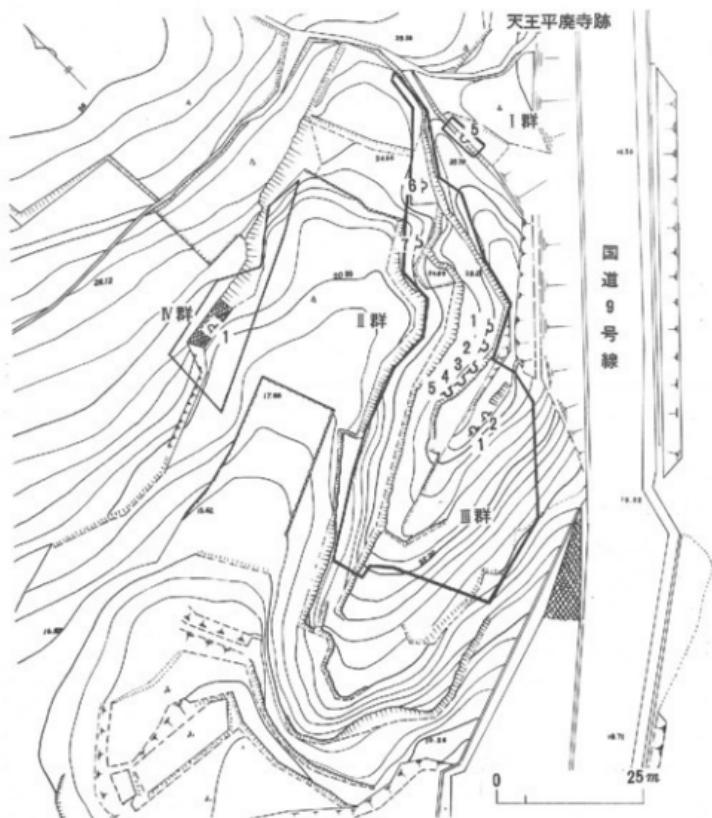


図3 横穴群分布図

### I 群1号穴 ('69年調査)

この横穴は第I群のうち東端にある。かろうじて玄室だけが残っている。礫灰岩質の岩盤に掘られている関係で、保存はよい。プランは不整な方形を示しわざかに胴張りがあつて羨道との区別が明瞭でない形式のようである。断面は丸天井形式を示しているが、奥壁部の高さは30cm内外という低さで、プラン、掘穿の技術などすべての点においてきわめて粗雑な造りである。主軸はほぼ北西-東南に向て東南側に開口している。玄室の長さ180cm、中央の幅196cm、天井部の高さは86cmをはかる。なお、奥壁に近い床面に掘穿時のノミ痕が残っている。ノミ痕の幅2cm前後である。また、羨道側が一段下がっているのは後世の石切りによったものである。遺物はない。

### I 群2号穴 ('69年調査)

第1号穴の西側に1.8m離れて掘られているが、いまは玄室の奥壁からわずか74cmしか残っていない。床面のレベルは第1号穴と同じで標高24.65mをはかる。プランは不整の正方形であろうか。天井は丸天井である。残存部の最大幅230cm、高さ105cmを有する。主軸の方向は北西-東南に向てている。玄室前半から前庭部にかけては不明である。遺物は認められなかった。

### I 群3号穴 ('69年調査)

北々西から南々東に向て開口しており、玄室だけが残っている。プランは不整円形に近いもので、天井は低い丸形を呈す。床面の西側に幅5cm、深さ14cmの溝が掘ってある。残存部の長さ207cm、最大幅203cm、天井の高さは100cmあり、羨道部の側は一段低くなつて92cmをはかる。床面の高さは標高25.38mある。遺物は認められなかった。

### I 群4号穴 ('69年調査)

第3号穴の西側1.8m離れてある。玄室だけが残つておらず、第I群のなかでは最も整備された横穴である。すなわち、プランは正方形を示し、床面の中央がわずかに凹む。壁面の立ち上りは70~60cmまで直立し、天井部は家形に近い平形を示す。残存部の長さ200cm、幅230~225cmで、奥壁が広くなっている。高さは125cmで平入りの形式であろうか。床面の標高は24.71mある。これまた遺物はない。

(以上は『島根埋蔵文化財調査報告』第II集をもとに作製した。)

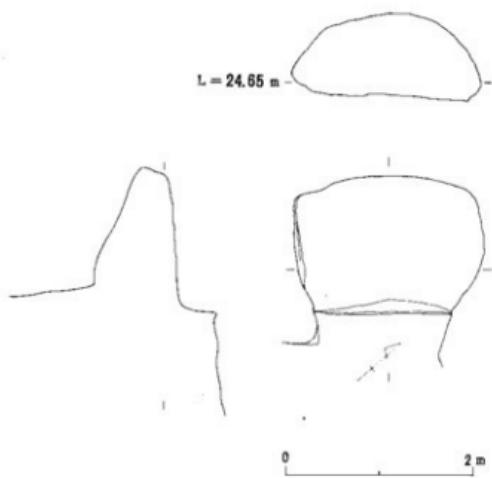


図4 I群1号穴実測図(1/60)

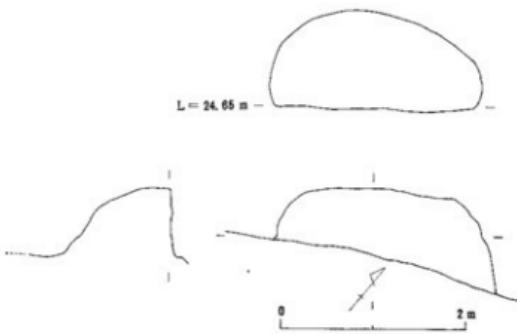


図5 I群2号穴実測図(1/60)

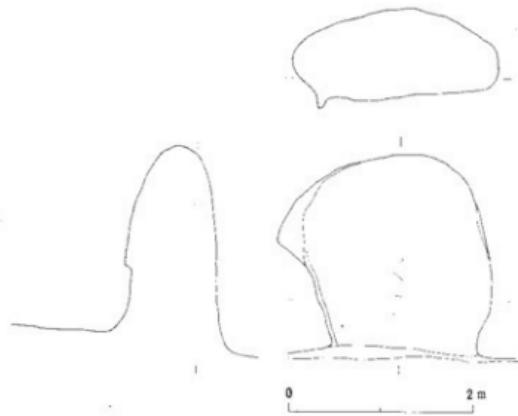


図 6 I群 3号穴実測図 (1/60)

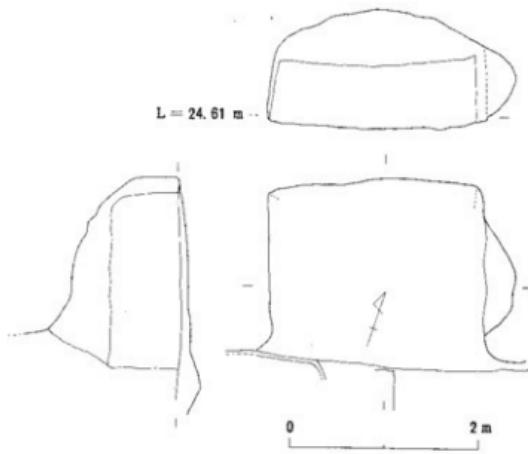


図 7 I群 4号穴実測図 (1/60)

## I 群 5号穴 ('79年調査)

I群の最南東端、1～4号穴とは若干離れた位置に存在する不整形丸天井型横穴である。後世の攪乱や二次的加工を数度にわたって受け、横穴自体もかなり損壊しており、遺物も全く検出できなかった。

横穴は平面不整形で隅も十分に加工されない方形に近いもので、立面も十分に加工されず、丸天井のようであるが天井は大部分を失なっているため判然としない。羨道部も削り取られており、不明である。玄室の規模は長さ190cm、幅280cm、高さ100cm程である。排水溝は認められなかった。

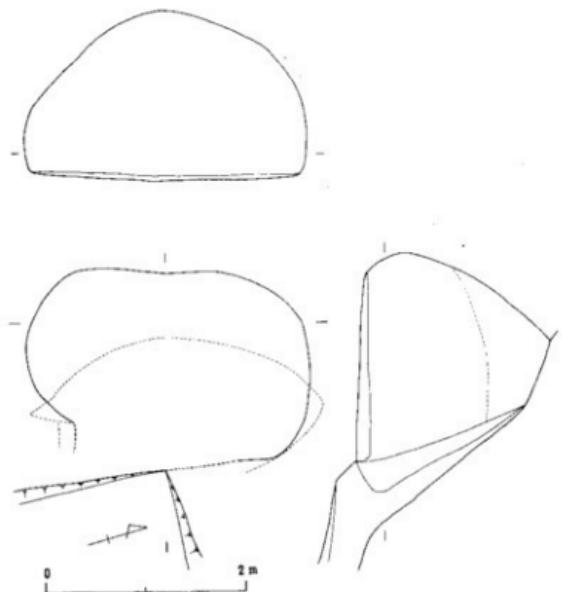


図8 I群 5号穴実測図 (1/60)

## II 群1号穴 ('69年調査)

II群のうちでは最も高い位置にあって床面の標高は 28.89 m ある。調査した横穴群のうちで最も保存度のよい横穴である。主軸はほぼ東南—北西におき北西方向に開口している。玄室のプランは奥壁の側が広い梯形を示し、天井部は前半部が落下しているが丸形である。平入りの形式である。その規模は奥行 265 cm、奥壁の幅 380 cm、前側の幅は約 320 cm をはかり、天井の高さは中央で 180 cm である。羨道部は長さ 50 ~ 35 cm とごく短く、幅は 85 cm 前後である。また、羨門部には閑塞装置用の掘りこみがある。前庭部は床面だけが残っているが、長さ 255 cm、幅 145 ~ 120 cm あって中央が狭くなっている。なお、玄室の前端から前庭部の中ほどにかけて浅い排水溝があり、それより先は傾斜が変って先端は一段をつくっている。

この横穴における遺物は、前庭部に認められた一群の須恵器である。すなわち、排水溝の先端に須恵器壺蓋と壺が 2 枚逆転しており、さらにそれより約 60 cm 離れた位置に須恵器壺身が認められた。

## II 群2号穴 ('69年調査)

横穴の前半分ほどを後世の石材切出しに際して失なっており、9号線バイパス工事に伴ない発掘調査が行なわれたものである。

平面は隅丸方形を呈し、奥壁中ほどから壁との境界に沿い 7 ~ 8 cm の断面方形の溝が羨道部にかけてめぐっており、おそらく羨道部へ連がっていたと推定される。立面形は壁の立上りが内湾気味で、天井も平天井を意識しているものの十分にその加工が認められない。

規模は奥行 250 cm (復原)、幅 290 cm、高さ 200 cm ほどである。遺物は検出されていない。(以上は『島根県埋蔵文化財調査報告』第 II 集をもとに作成した。)

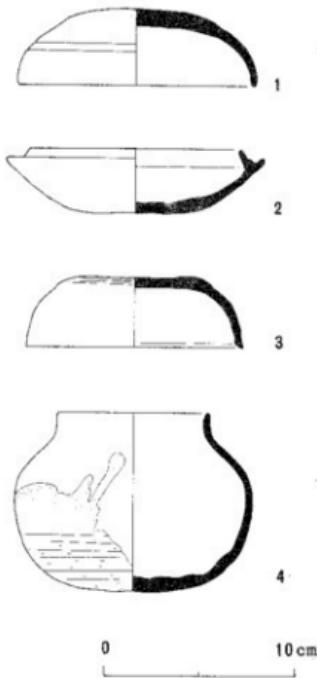


図 9 II群1号穴出土遺物実測図(1/3)  
(近藤 正 原図)

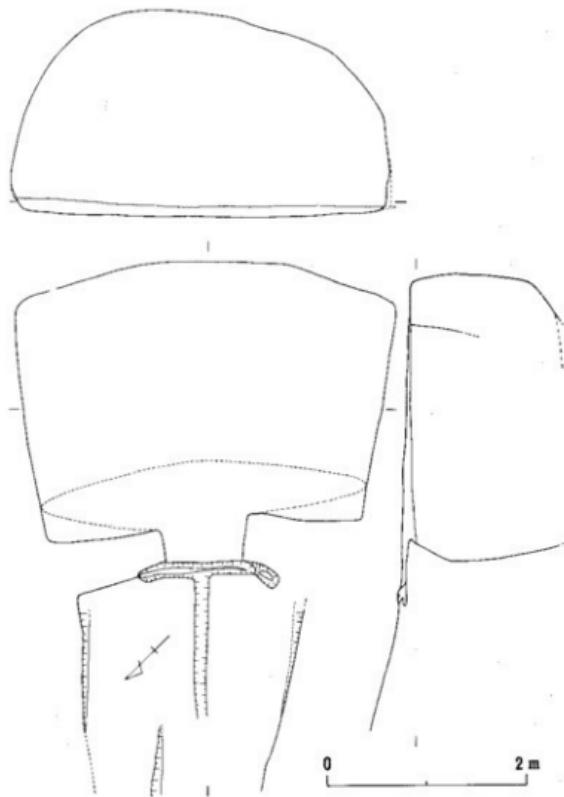


図10 II群1号穴実測図(1/60)

## II 群3号穴 (79年調査)

2号穴から8m西にあり、羨道の一部を残し、玄室の比較的良く残存する横穴である。人骨出土。

横穴の規模は玄室長さ250cm×幅330cm(奥)、260cm(前)、高さ60(奥)～100cm(前)、羨道長40cm、幅70cm、前庭長120cm(残)、幅130cmなどで、平面は奥にむかっていくぶん開く不整方形である。玄室中央から羨道を通り、前庭まで排水溝が認められる。羨門部には入口蓋の受け部となるくり込みが認められる。天井は低く壁はかなり直立に近い、いわゆる平天井形式のもので、奥壁には壁と天井の界線がおぼろげながら

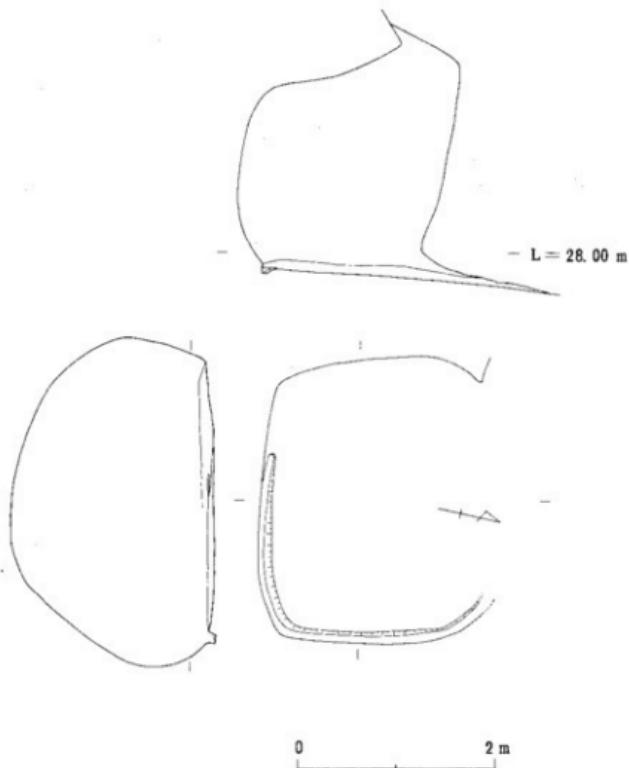


図 11 II群 2号穴実測図 (1/80)

認められる。床面はほぼ水平に近いが、排水溝に向かって多少下がる傾向が認められる。

内部は後世の攪乱や松根によってかなり乱されており、直接の関連性が薄い人頭大の石も散乱している。人骨もかなり動いているが、奥壁に接する位置にきちんと据えられた一群とその手前の平行におかれた2個の骨片は旧状を保っているものと判断された。

遺物は散在しており、土砂の流入によってほとんどが動かされたものと考えられる。人骨をきちんと並べ直したことから複数回にわたる埋葬が行なわれたと推定される。耳環も大小あって4個存在することはその裏づけとなる。

遺物は下にかかげるものがすべてで、須恵器の量が少ないことが指摘される。また装身具

として耳環が2対、石製紡錘車が1個検出された。

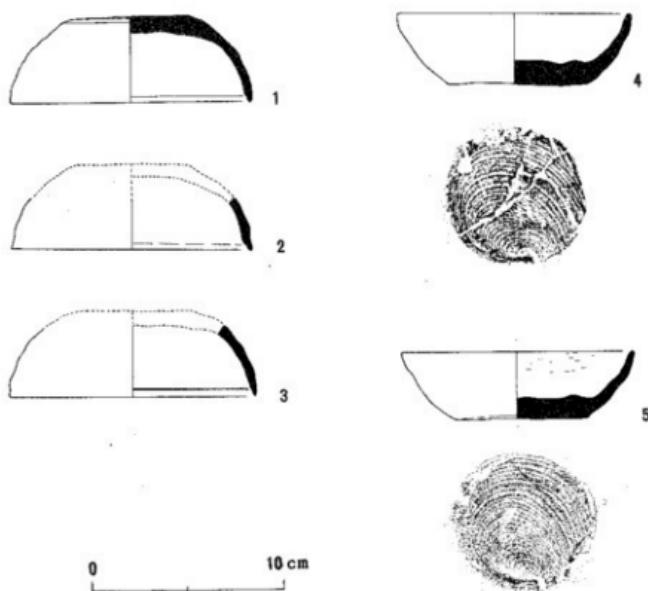


図12 II群3号穴出土遺物実測図(1/3)

## II 群4号穴(79年調査)

3号穴の西5mはなれて3号穴とはほぼ同レベルに存在し、天井部をほとんどすべて欠失した横穴である。

横穴は北向きに開口し、玄室は南西隅が拡張された平面形を呈する。本来のプランは奥行200cm(270~200cm)、幅290cm、高さ110cmほどと推定される。

後世に擾乱を受けたうえに土砂が流入し、また松根が入りこんでいて大半の遺物は二次的に動いており、特に奥壁付近と東半分は後世の土師質土器が床面にまで達して検出されている。須恵器・鉄器共に北西4分の1部分に集中し、勾玉・耳環・紡錘車はほとんど壁

に接して検出された。

玄室の各隅は比較的丁寧に加工され、床面には主軸方向にノミ痕が無数に残っている。渓道部は短く、幅 60 cm、奥行 30 cmほどで、渓門部には閉塞用のくり込みが認められ、その底は前庭部へ続く排水溝につながっている。

前庭部は残存が良くないが、幅 200 cmほどで直線的にのびるものと推定される。

天井部は欠失していてよくわからないが、残存部の状況からして、比較的整った平天井を呈するものと推測される。

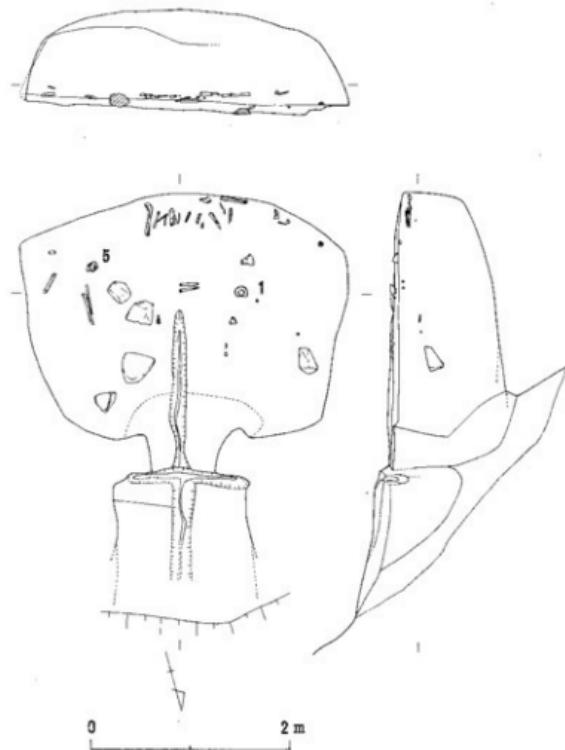


図 13 II群 3号穴実測図 (1/60)

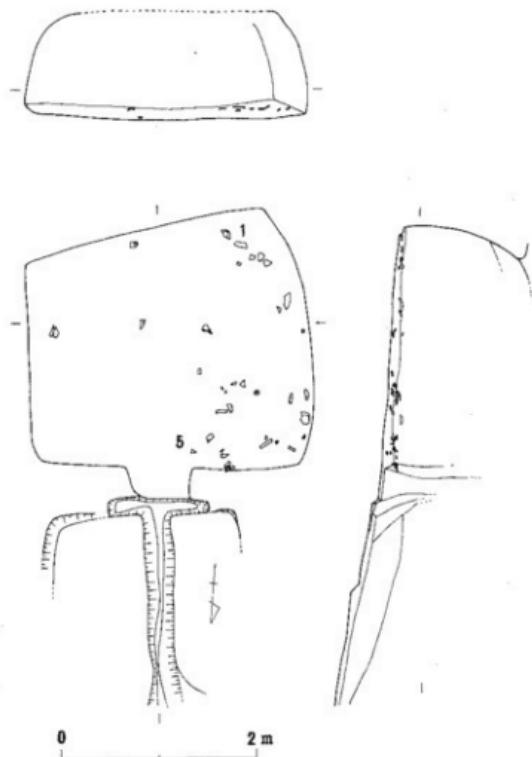


図14 II群4号穴実測図(1/60)

## II群5号穴 ('79年調査)

後世の石切出しによりその大半を失なっているがII群中最も整った横穴である。

玄室は壁をほとんど欠いているが北東側に僅かに残る天井部からほぼその全形をうかがうことができる。床面は長方形で奥行 $170\text{ cm}$ に比し幅が $240\text{ cm}$ と長く、本横穴群中では異色である。各隅や床面は丁寧なノミ痕を残し、きちんと仕上げられている。玄室中央部には奥壁のすぐそばから排水溝が設けられ、玄室の2倍ほどの長さ( $310\text{ cm}$ )をもって斜面に通じている。両側壁はほぼ直立するがかなり低く( $70\text{ cm}$ )、平天井を呈す天井部とは直角に交わって界線をなす。

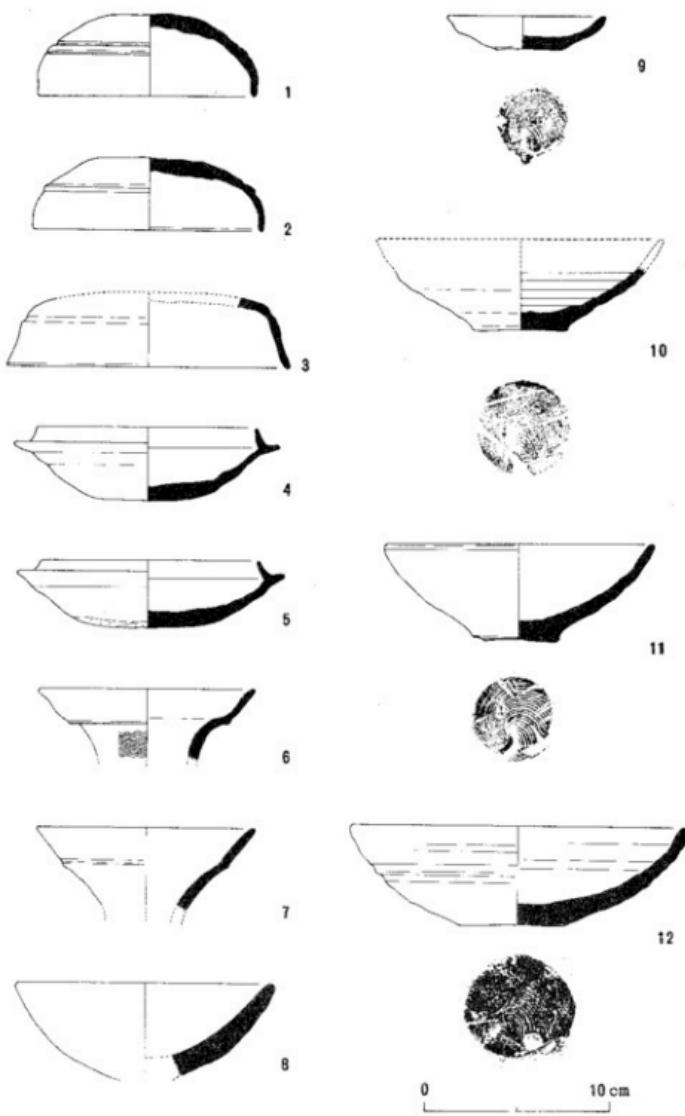


図 15 II群 4号穴出土遺物実測図 (1:1/3)

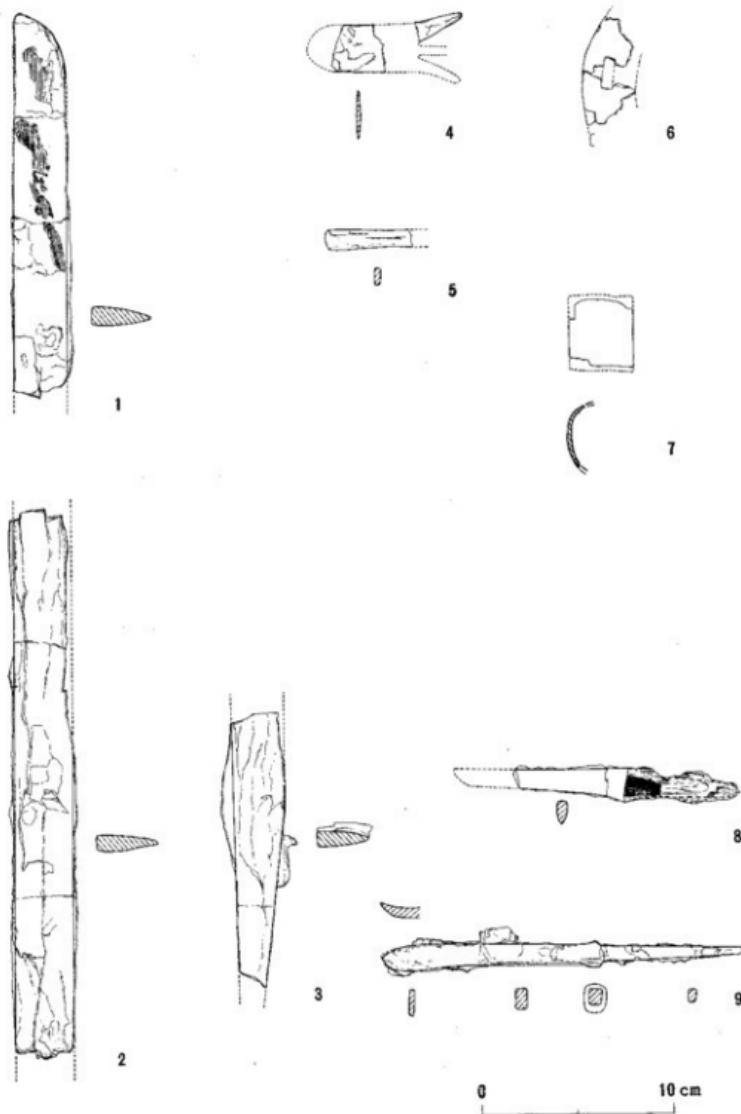


图 16 II群 4号穴出土遗物实测图(2:1/3)

遺物はほとんどが床面直上で検出され、上面を削られてはいるが副葬品の大半は失なわれていないものと思われる。玄室内の石はおそらく閉塞石であったと考えられ、いずれも円石で、海ないし海に近い川において見られるものである。須恵器は玄室南西隅、中央部、東隅に数個ずつたまつており、中央部の蓋には刀子が入れられていた。また東隅では土師器甕片が出土している。

玄門、羨道部は完全に削られていてまったく不明である。

出土土器は須恵器 11 個体、土師器 2 個体分で、須恵器では蓋坏の蓋が大半を占める。蓋坏の蓋は天井部と口縁部の境にやや鈍化した稜を残し、天井部の大半をヘラ削りにより成形されたもの（図 18-3～5）、ヘラ削りの少ないもの（図 18-2、6）と稜を有さず、ヘラ削りもごく一部にとどまるもの（図 18-1）が認められる。坏は大小各 1 個体分が認められる。

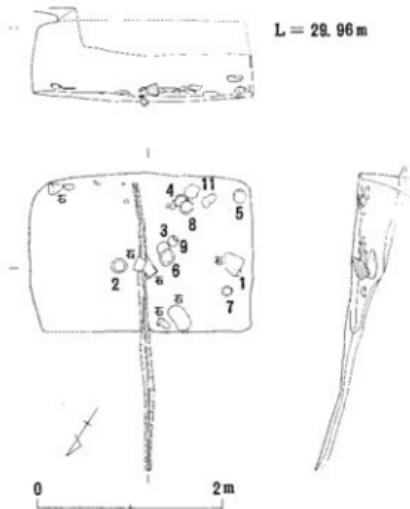


図 17 II群 5号穴実測図(1/60)

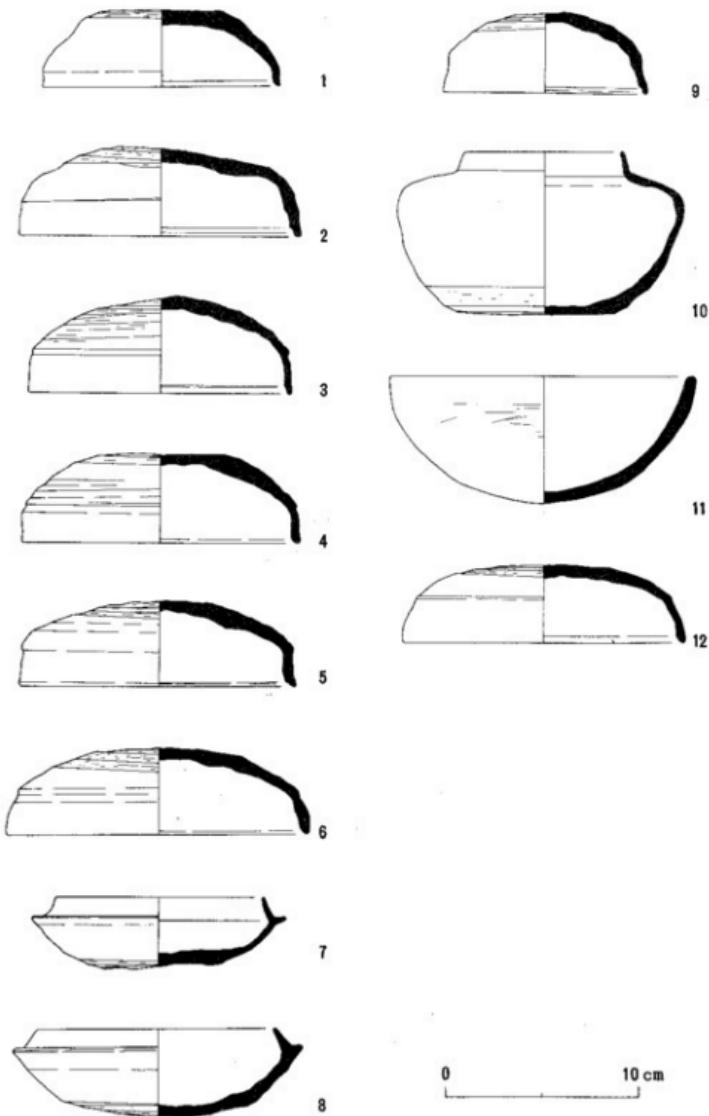


図1-8　II群5号穴出土遺物実測図(1/3)

## II 群6号穴 ('79年調査)

II群の最東部に位置する不整形、平天井様の横穴で一括遺物を出土している。

横穴は前庭部を削平されており、内部も渠道付近をのぞいて盗掘されたものようである。平面形は各隅を十分にくり込んでおらず、梢円形に近い隅丸方形を呈している。壁も十分に直立しておらず北東壁は床から天井へゆるやかな曲線を描いているが、南西壁はやや直立し、不明瞭ながらも界線ができている。奥壁も同様であるが一応平天井様の加工を施したようにみえる。床面は若干前に傾くが、排水溝は認められない。玄室床面も十分に平坦な加工を施されていないのがその高低差から窺える。

遺物の大半は盗掘により大半は持ち出されたようで玄室の中央部周辺にも一片も発見できなかったが、堆積土断面の観察により掘残されたと考えられる玄門部に須恵器・土師器が一括して供獻された形で検出され、やや西側には刀子片が残されていた。

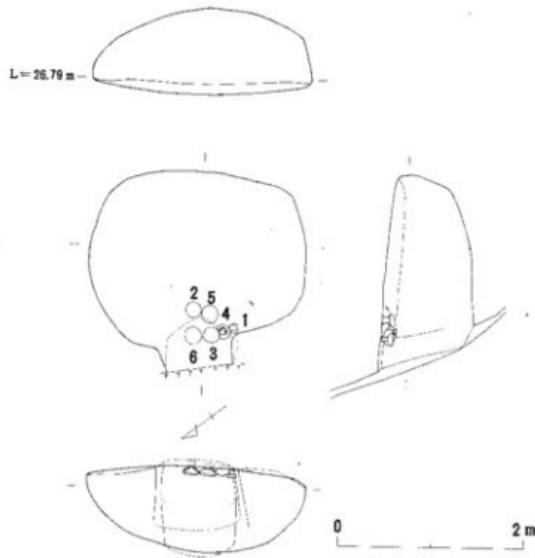


図19 II群6号穴実測図 (1/60)

須恵器高坏は坏部分に焼ひずみが認められ、坏部外面に稜を残し、脚部中央には2条の凹線をめぐらす。脚部にはスカシ窓が刻まれず、脚端部内面は偏平で安定感のある小型品である。増（短頸壺）は肩が良く張り、体部から底部にかけて広くヘラ削りを行っている。底部は肥厚し、外面は湾曲して不安定である。土師器高坏は口径、器高には大差がない。口唇部はまっすぐ外方にのびる（図20-2）、外反する（図20-3、5、6）ものがあり、脚部外面をハケ目調整するもの（同3、5）、ヘラで削るもの（同2、6）が認められる。

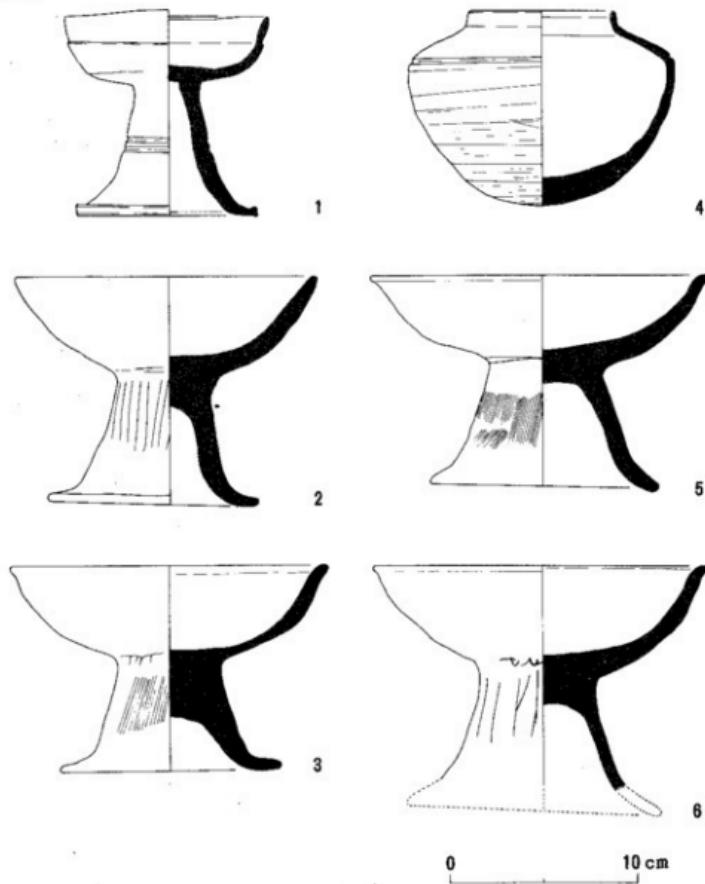


図20 II群6号穴出土遺物実測図(1/3)

## II 群7号穴 ('79年調査)

II群の下段、6号穴に近接する不整長方形横穴で一部が開口していた横穴である。

玄室は十分に加工が施されておらず、特に西壁は中途でその掘り込みを中止したようである。奥行(220cm)が幅(130cm)よりも相当長い。奥に細長い平面形を呈し、中央部付近から前底部にかけ排水溝が設けられ、特に中央部はくぼみのようになっている。玄門部の西隅は十分にくり込まれておらず、いくぶんんだらかに羨道に続き、羨道も当群中ではやや長いほうに属する。(40cm)。西側壁は十分に直立していないが、西壁はいくぶん直立する。天井は丸みをおびているが、全体としては平天井を意識したものといえる。

羨門部には閉塞用のくり込みが設けられ、板状の閉塞装置があったことが知られる。前庭部は東側を欠いているが200cm以上存在したものと推定される。

遺物は堆積土中から須恵器坏片(図21-2, 3)が、床直上から蓋、耳環、脚付盤が検出され、その位置はいずれも玄室中軸線付近である。

須恵器蓋坏の蓋(図21-1)は外面をすべてナデにより仕上げており、坏も底部にへラ切木調整の痕を残す。(図21-2, 3)いずれもやや小型品である。脚付盤は坏部がゆるやかな曲線を描くと同時に口唇部よりも下に最大径が測れる。脚は外方に八の字状にのび、安定感がある。

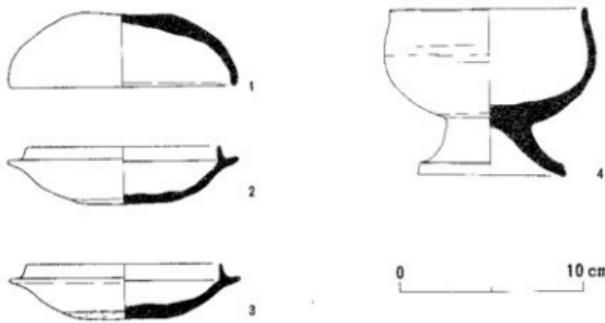


図21 II群7号穴出土遺物実測図(1/3)

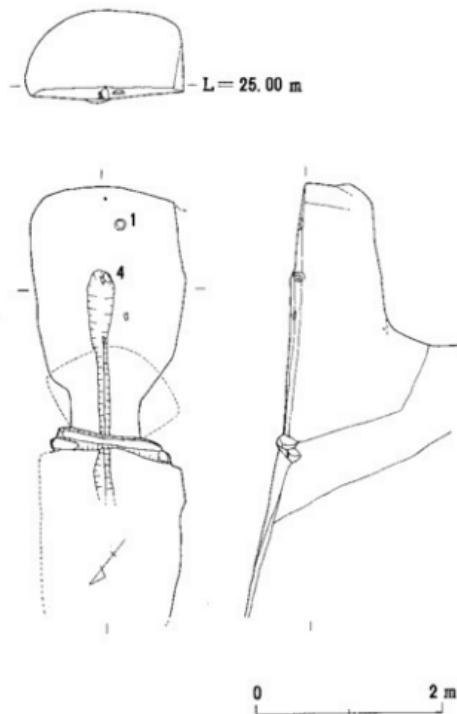


図2-2 II群7号穴実測図(1/60)

<松田谷横穴群出土の耳環・玉類>

耳環はII群3号穴からの5個を最高にII群4号穴で2個、II群5号穴、II群6号穴、III群1号穴で各1個が、またII群2号穴と同3号穴の間で1個が表採されている。大小があって、対をなすことが明らかなものは2セット4個である。(一覧表参照)

勾玉はII群3号穴、同4号穴から出土しており、いずれも赤茶色を呈し、一方から穿孔しているが、他方には割れ防止のくり込みをもうけている。紡錘車は外面に鋸歯文を施し複雑な文様構成を示す。II群3号穴出土品(図2-3-11)は底面にも文様を施している。

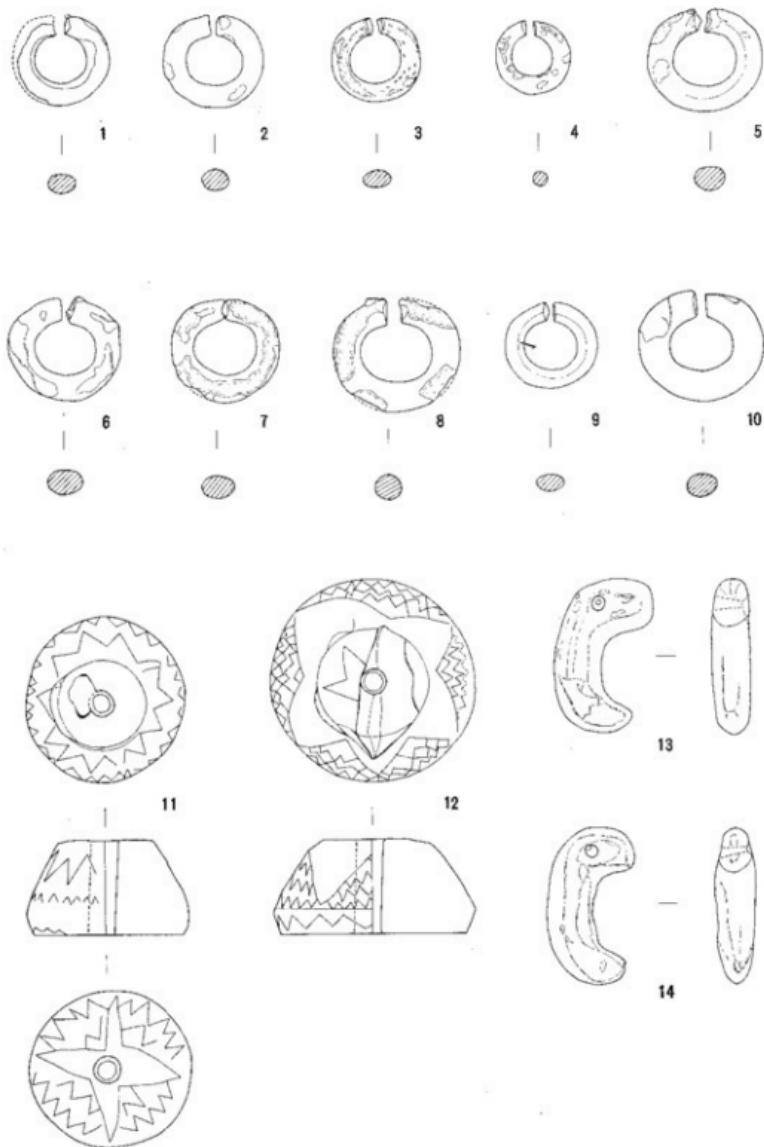


図23 耳環・玉類実測図(2/3)

松田谷横穴群出土耳環・玉類一覧表

|       |                |       |                  |
|-------|----------------|-------|------------------|
| 図23-1 | II群3号穴。2、9と同大。 | 図23-8 | II群5号穴。10と同大。    |
| -2    | II群3号穴。1とセット。  | -9    | II群6号穴。残存良好。     |
| -3    | II群3号穴。        | -10   | III群1号穴。重量感あり。   |
| -4    | II群3号穴。残存良好。   | -11   | II群3号穴。やや硬質。     |
| -5    | II群3号穴。重量感あり。  | -12   | II群4号穴。軟質。       |
| -6    | II群4号穴。7とセット。  | -13   | II群3号穴。          |
| -7    | II群4号穴。        | -14   | II群4号穴。<br>} 同大。 |

### III 群1号穴 ('79年調査)

松根により天井部をほとんど欠く横穴で排水溝が十文字に走り、閉塞石が存在する。

II群とは尾根をはさんで南側に位置し、2号穴と共にII群1～5号穴とほぼ同レベルの反対方向に開口する。玄室はきわめて不整形で十分なプランの確認ができないほどである。各隅も丸味をおび特に東隅は角ばらずに羨道部へ続いている。中軸線上に幅7～8cm、それに直交してやや細く幅4～6cmの排水溝が認められ、中軸線上の溝が一段低く掘られている。

遺物は、後世に攪乱をうけたためか散在する傾向を示し、奥壁に接して須恵器壺が、東西排水溝の端近くにそれぞれ直刀片が床直上で、また耳環が中軸線上の排水溝近くの床直上で検出された。

また、後世の土師質土器もあり高くないう位置から出土しており、玄室内の遺物は二次的に動いている可能性もある。

西側壁は充分直立せず、断面形はかまぼこ形を呈する。奥壁もまた同様である。床面も十分に平坦にされていない。

羨道は20cm前後と極端に短く、すぐに前庭部へつながり、前庭部との間に20cmほどの段差がある、そこへ地山を加工した板石や円礫が閉塞石としてつめられている。前庭は幅がさほど広くはない(100cm前後)、比較的平坦な床面を有している。

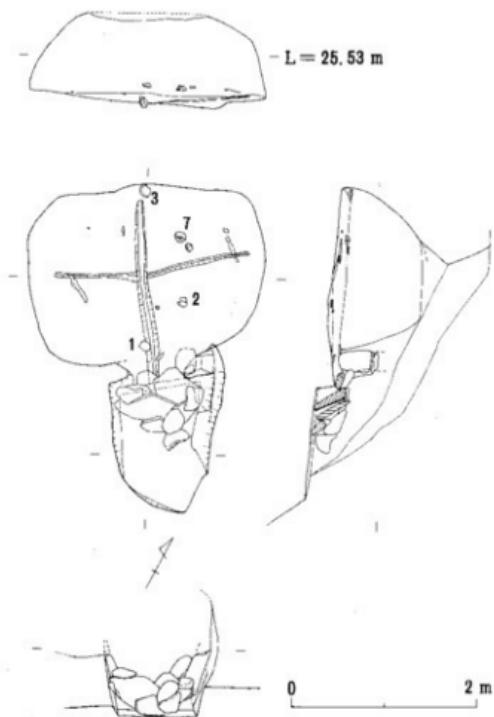


図24 III群1号穴実測図(1/60)

出土遺物中須恵器は蓋坏のみが検出された。蓋は天井端部に沈線を施し、ヘラ削りによる凹凸を良く残している。口唇部はやや外方に開き、内側にはわずかながら稜線を残す。坏は底部のごく一部にヘラ削りを施し、内面は凹凸が明瞭である。たちあがりが厚く、内傾するもの（図25-3、5）と途中から直立し、器壁の比較的薄いもの（図25-4）の二種類がある。

土師質土器は3個体が検出された。底部内面の指圧による凹凸を良く残し、II群3号穴

出土のそれ(図12-4、5)と類似するもの(図25-6)と内外面に凹凸を良く残し厚く安定感をもったもの(図25-7)、それに全形を窺えないが、薄い器壁と外方に直線的に開く口縁部をもち、外面に沈線による文様を施すもの(図25-8)がある。

鉄器はいずれも直刀で4振を数える。刃先は2振しか残存していないがいずれも丸味を帯びている。大型のもの(図26-3、4)には目釘穴が認められず、小型品には径3mmほどのものが少なくとも1個認められた。

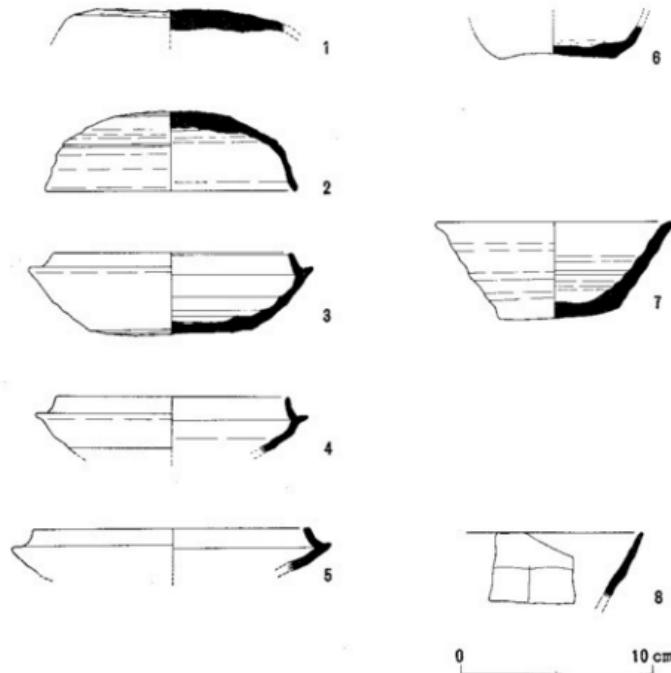


図25 III群1号穴出土遺物実測図(1:1/3)

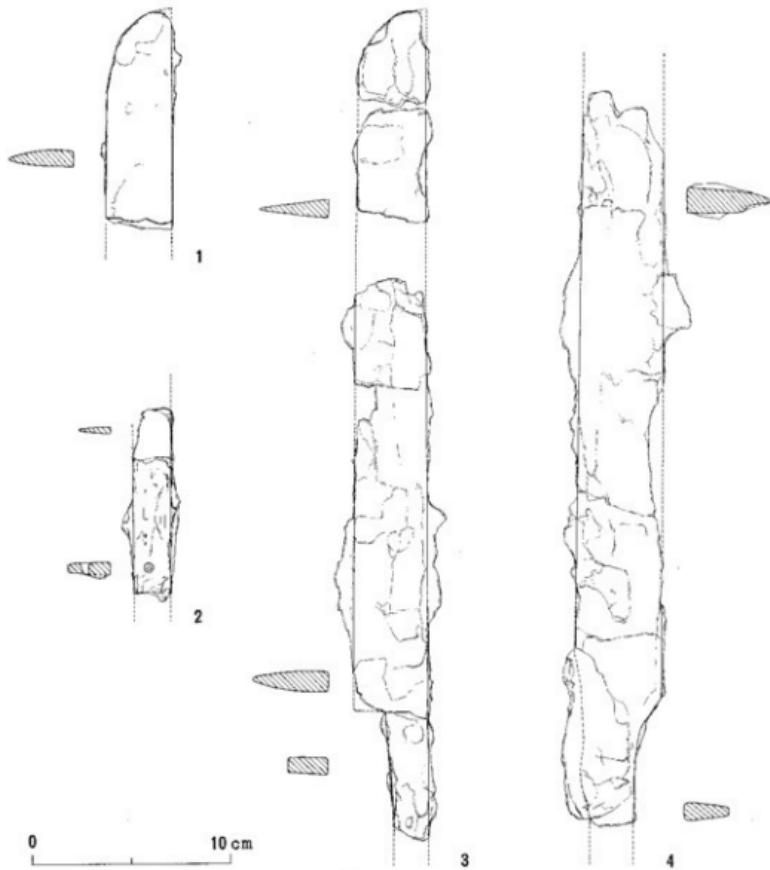


図 2-6 III群 1号穴出土遺物実測図 (2:1/3)

### III 群 2号穴 ('79年調査)

小型のものであるが一応埋葬遺構と考えられる。崖面を水平に掘り進めたように穿っており、中途に段がある。全長170cm、幅60cm、高さ120cmほどで、図にみるよう奥部に地山からなる栗石がつめこまれていた。加工は粗雑で、遺物は検出されなかった。周囲に足をかけたと思えるくり込みが無数に存在する。

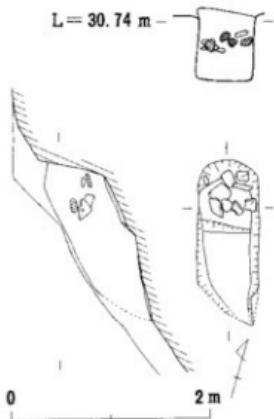


図 27 III群 2号穴実測図 (1/60)

#### IV 群1号穴 (79年調査)

II群の北側、南向きの急斜面に半分ほど残存し、本横穴群中最も整美な横穴で屍床を2つ有する。

後世の採石により玄室の半分しか残していない。開口方向はほぼ真南である。玄室の幅は350cmほどあってかなり大型の部類に属する。高さは150cmほどで、屍床は幅130cmをはかるが、長さは不明である。

床はやや漢道方向に下がり、ほぼ平坦である。残存する2隅は丁寧な加工をみせ、ノミ痕もこの部分にのみ残っている。東壁は十分でないが西壁、奥壁はよく直立し、一部には天井、側、奥壁の界線が認められる。後世に何度も擾乱を受けているためか、遺物は検出できなかった。

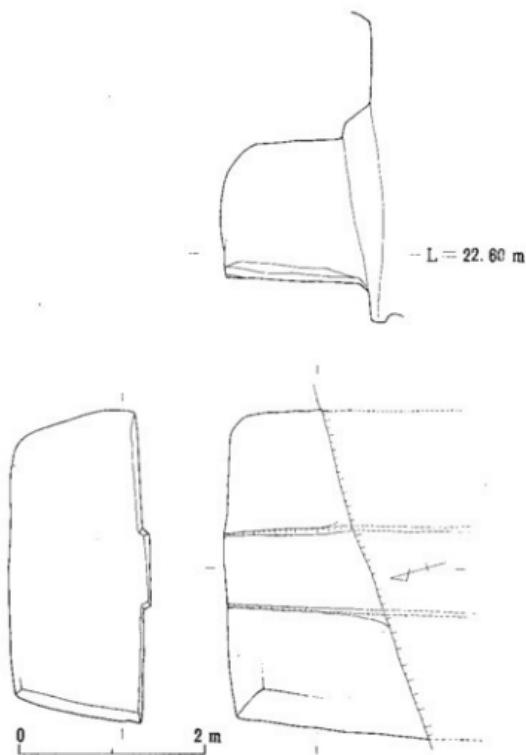


図2-8 IV群1号穴実測図

#### 表面採集された遺物

表面採集された遺物について、その位置を明らかにしておく。1～3の須恵器、6の砥石、7の耳環はII群の斜面で表採された。4、5、7の須恵器はIV群1号穴の南側堆積土中で表採された。

同上の表採品と遺構との関係は直接窺うことはできないが、3はII群5号穴付近、6はII群3号穴前庭部北側、7はII群2号穴と同3号穴の中間部で表土中に含まれており、III群1号穴、II群5号穴出土の耳環(図2-3-8、10)と同大である。

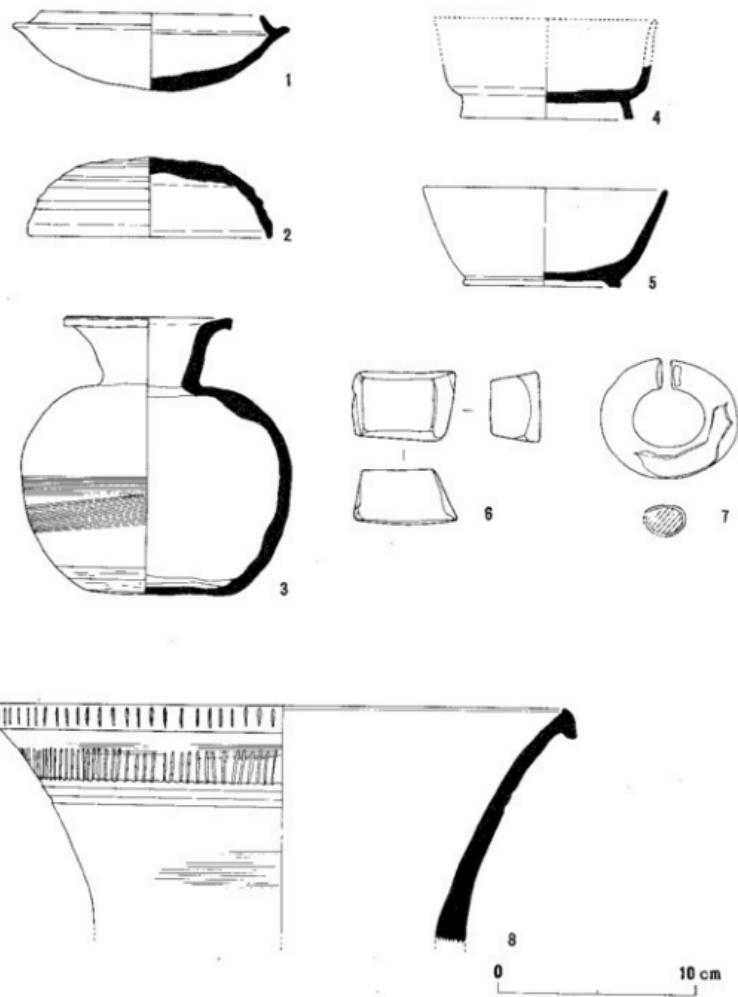


図29 表面採集遺物実測図(1/3)

## IV 小 結

少なくとも 15 穴からなるこの松田谷横穴群は大田市内においては有数の横穴群である。この群の全体像を窺う手掛りとなるであろういくつかの点について以下に整理しておく。

まず、立地であるが、この横穴群の周囲には西側に熊屋谷、中山曾根横穴群、東には田長横穴群、西迫横穴などがある大田市内における横穴の分布の核ともいえる位置にある。特に、熊屋谷横穴群はその数においてこの松田谷横穴群に比肩し、約 12 穴を数えることは分布論から興味深いあり方を示す。

次に、この横穴群中の支群についてである。I 群：5、II 群：7（或は 1～5 号穴と 6、7 号穴とに細分できるかもしれない）、III 群：2、IV 群：1（III、IV 群については、その地形などからこれ以外にも存在した可能性がある。）が確認され、数的には各群にバラツキがある。また、I 群、II 群（1～5 号穴）はその支群内の配置から、強い関連が想定される。

さて、15 基を数える横穴の構造について、いくつか整理しておこう。

- ① 美道を残す横穴はいずれも美道部がきわめて短い。
- ② 天井は丸天井が大半であるが、IV 群 1 号穴のように明確な平天井のものもある。
- ③ 排水溝を有するものがいくつかあって一つの特徴となっている。排水溝の形態は各横穴によって異なるが、いずれも排水溝として機能しうるレベル差を確保している。
- ④ 天井は全体的に低い。これは美道の短さによって制約されたものと考えられる。
- ⑤ したがって側壁、奥壁とも十分に立上らない。
- ⑥ 床面は正方形ないし長辺に美道をつける傾向が強いが、いずれも不整なものとなっている。また II 群 7 号穴のような細長く不整形なものもある。しかし IV 群 1 号穴は、きわめて規格性の強い床面でかつ、がっちりした屍床を有しており、当横穴群中では異色である。
- ⑦ 横穴内の整形は必ずしも十分に行なわれていない例が多く、壁面にとどまらず床面にも無数のノミ痕を残している。
- ⑧ 美門の閉塞装置は II 群 1 号穴を除きいずれの横穴も残存していないかったが、地山のくり込みから、板状の閉塞を行ったことが推測される。II 群 1 号穴の閉塞石はこの横穴群中では異例である。
- ⑨ II 群 2 号穴にみられる小形横穴は類例に乏しいため、埋葬施設と断定することはできないが、一応群の数に入れておく。周囲に足掛状のくぼみが存在した。

⑩ 横穴の規模は大小様々で、類似性の強いものではなく、技法等を総合しても、同一工人による規格的なものとは考え難い。

⑪ 二次的に攪乱を受けたものが多く、土師質土器が供獻されたような出土状態を示すものもいくつかある。またⅡ群4号穴では天井が崩れ落ちた玄室内の堆積土中に、隣接する天王平廃寺跡のものとみられる布目瓦が含まれていた。

次に検出された遺物はかなりの量にのぼるが、二次的な移動をしたものが多く十分に一括かつ層位の良好な資料としては取扱えない。しかしⅡ群5号穴、6号穴出土土器は一括遺物として（ただ量的に減少している可能性は強い）取扱ってよいものと考える。観察により気付いた点をいくつか列挙する。

① 玉、耳環は別の横穴のものとの類似点も多く、同一の入手経路が想定される。

② 須恵器は焼ひずみ等の傷みは少ない。蓋坏が主で中、大型品は壊片一片のみである。

③ 須恵器の胎土中には白色ブロックの小土塊が大半の場合含まれていて、同一ないし近隣の生産地からの供給を想定させる。

④ 土師器はいずれも丹彩品でⅡ群5号穴、同6号穴からのみ出土している。いずれも厚手で丁寧な整形、調整を行っている。

⑤ 鉄器は直刀、刀子、鉄鎌の3種のみである。直刀の含まれる横穴とそうでない横穴の質的差があるようにも見える。

⑥ 横穴の時期は、初葬時の副葬土器が特定できないため、確定できないが、おおよそ次の期に分けることができよう。（追葬期間があるので、造営期間は重複する。）

1期：Ⅱ群3号穴、Ⅱ群5号穴

2期：Ⅱ群4号穴、Ⅱ群1号穴、Ⅱ群1号穴、Ⅱ群6号穴

3期：Ⅱ群7号穴

これらの時期区分は山陰における須恵器編年のⅢ期～Ⅳ期初頭にあたる。

⑦ 後世に横穴内に供獻された土師質土器は形態・技法に差があり、Ⅱ群3号穴出土の2個体が最も古い様相を示し、統いてⅡ群1号穴、そしてⅡ群4号穴出土のそれが供獻されたものと推定される。

以上、略記してきたが、当横穴群の個体的、また地域史上における歴史的意義については、周囲の横穴群や集落跡を含めた今後の調査、研究に待ちたい。

### 松田谷横穴群出土土器観察表

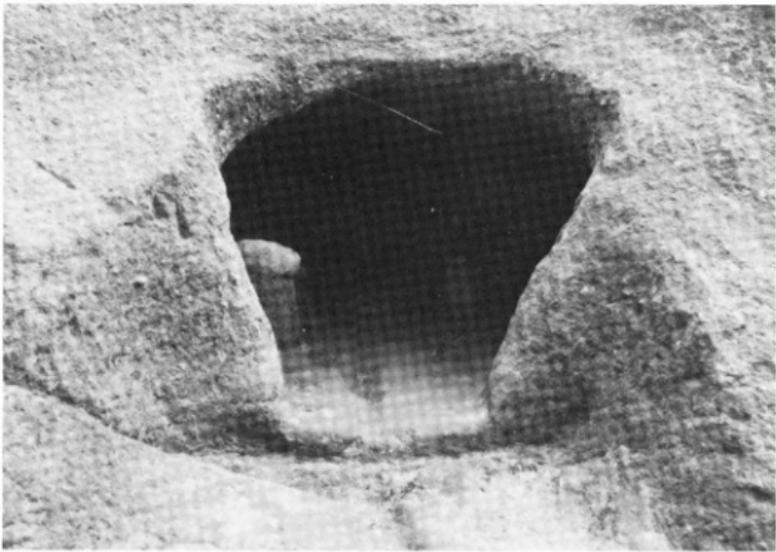
| 番号    | 器種 | (口径×高<br>法<br>量)<br>cm | 色調  | 胎土  | 焼成   | 備考  |
|-------|----|------------------------|-----|-----|------|---|
| 図9-1  | 蓋  | 12.6 × 3.9             | 灰白色 | ?   | 良好   | 時計(ロクロの回転方向、以下同じ)                         |
| -2    | 环  | 11.1 × 3.3             | 灰白色 | ?   | 良好   | 時計。                                       |
| -3    | 蓋  | 11.4 × 3.6             | 灰白色 | ?   | 良好   | 時計。                                       |
| -4    | 壇  | 8.1 × 9.3              | ?   | ?   | ?    | 時計。外面に自然粒の痕跡。                             |
| 図12-1 | 蓋  | 12.4 × 4.5             | 青灰色 | 密   | 良好   | 時計。4/5完形。内面回転ナデ。外面回転ナデによるゆるやかな凹凸。ヘラケズリ複数。 |
| -2    | 蓋  | 12.5 × (4.5)           | 灰褐色 | 密   | 普通   | 時計。1/5。                                   |
| -3    | 蓋  | 12.8 × (4.5)           | 灰褐色 | 密   | 普通   | 時計。1/4。                                   |
| -4    | 环  | 12.0 × 3.7             | 赤灰色 | 密   | 普通   | 時計。底完形。回転糸切。                              |
| -5    | 环  | 12.1 × 3.5             | 褐色  | 密   | 普通   | 時計。底ほぼ完形。2 × 3 mmのゲンブ岩あり。回転糸切。外面向転ナデ。     |
| 図15-1 | 蓋  | 11.7 × 4.4             | 白灰色 | やや粗 | 普通   | 反時計。4/5強。赤色塗彩部あり。                         |
| -2    | 蓋  | 12.3 × 3.9             | 青灰色 | 密   | 普通   | 反時計。4/5強。砂粉極少。                            |
| -3    | 蓋  | 15.2 × (4.0)           | 青灰色 | 密   | 普通   | 時計。1/5。                                   |
| -4    | 环  | 11.8 × 4.0             | 青灰色 | 密   | 普通   | 時計。ほぼ完形。外面に白色部あり(1/2)。                    |
| -5    | 环  | 11.7 × 3.6             | 青灰色 | 密   | 普通   | 時計。1/2。赤色塗彩あり。                            |
| -6    | 甌  | 11.6 × (3.6)           | 黒灰色 | 密   | 良好   | 反時計。口縁ほぼ完形。                               |
| -7    | 甌  | 11.7 × (4.5)           | 黒灰色 | 密   | 良好   | 反時計。口縁1/3。                                |
| -8    | 高环 | 13.8 × (5.0)           | 赤茶色 | 密   | 普通   | 1/6。赤色塗彩あり。                               |
| -9    | 环  | 8.4 × 1.8              | 褐色  | 密   | 不良   | 時計。1/3。回転糸切。                              |
| -10   | 环  | (15.5) × (4.8)         | 焦褐色 | 密   | 普通   | 時計。底部のみ。底部同径他2個体分。                        |
| -11   | 环  | 14.5 × 5.1             | 褐色  | 密   | 普通   | 時計。4/5。回転糸切。                              |
| -12   | 环  | 18.1 × 5.3             | 褐色  | 密   | やや不良 | 時計。2/3。回転糸切。                              |
| 図18-1 | 蓋  | 12.3 × 4.1             | 青灰色 | やや粗 | 普通   | 反時計。完形。                                   |
| -2    | 蓋  | 14.7 × 4.6             | 青灰色 | 密   | 良好   | 時計。ほぼ完形。1/5なし。                            |
| -3    | 蓋  | 13.6 × 5.0             | 青灰色 | 粗   | 普通   | 反時計。完形。                                   |
| -4    | 蓋  | 14.3 × 4.6             | 青灰色 | やや粗 | 良好   | 時計。1/2。                                   |
| -5    | 蓋  | 14.3 × 4.5             | 青灰色 | やや粗 | 良好   | 反時計。完形。⑦とset。                             |
| -6    | 蓋  | 15.7 × 4.6             | 青灰色 | やや粗 | 良好   | 時計。完形。                                    |
| -7    | 环  | 10.8 × 3.5             | 青灰色 | 密   | 良好   | 時計。ほぼ完形。                                  |

| 番号    | 器種      | (口径×高<br>量<br>法)<br>cm | 色調          | 胎土      | 焼成 | 備考                         |
|-------|---------|------------------------|-------------|---------|----|----------------------------|
| 図18-8 | 坏       | 12.4 × 4.6             | 青灰色         | 密       | 良好 | 時計。完形。                     |
| -9    | 蓋       | 10.6 × 4.2             | 綠灰色         | 密       | 良好 | 反時計。ほぼ完形。                  |
| -10   | 壇       | 8.3 × 8.6              | 濃灰色         | 密       | 良好 | 反時計。1/5。                   |
| -11   | 塊       | 15.8 × 6.7             | 赤茶色         | やや粗     | 良好 |                            |
| -12   | 蓋       | 14.6 × 4.1             | 綠灰色         | 粗       | 良好 | 時計。1/2弱。                   |
| 図20-1 | 高坏      | 10.8 × 10.7            | 灰褐色         | 粗       | 良好 |                            |
| -2    | 高坏      | 16.1 × 12.4            | 赤茶色         | 粗       | 良好 | 赤色塗彩。外面に石紋模様あり。脚下一部なし。     |
| -3    | 高坏      | 16.8 × 11.1            | 赤褐色         | 粗       | 普通 | 脚部一部なし。剥落著し。               |
| -4    | 壇       | 7.7 × 10.5             | 青灰色         | 粗       | 良好 | 時計。丁寧な成形。つなぎ目の接合も丁寧。底部球形。  |
| -5    | 高坏      | 18.2 × 11.4            | 赤茶色         | 粗       | 良好 | 赤色塗彩。脚一部なし。剥落若干。全体に丁寧なつくり。 |
| -6    | 高坏      | 17.8 × 13.2            | 赤茶色         | 粗       | 普通 | 脚下半部復原。                    |
| 図21-1 | 蓋       | 12.2 × 3.9             | 青灰色         | 密       | 良好 | 反時計。内側に。                   |
| -2    | 坏       | 10.4 × 3.2             | 青灰色         | 密       | 良好 | 時計。1/4。ほぼ完形。               |
| -3    | 坏       | 10.5 × 3.0             | 青灰色         | 密       | 普通 | 時計。1/4。                    |
| -4    | 脚付<br>壇 | 10.7 × 9.1             | 濃<br>青<br>色 | 密       | 良好 | 時計。乳白色1/2。                 |
| 図25-1 | 蓋       | ? × ?                  | 青灰色         | 密       | 良好 | 時計。                        |
| -2    | 蓋       | 13.1 × 4.1             | 暗青色         | やや<br>密 | 良好 |                            |
| -3    | 坏       | 12.4 × 4.2             | 青灰色         | 密       | 良好 | 反時計。4/5。                   |
| -4    | 坏       | 12.0 × ?               | 暗青色         | 密       | 良好 |                            |
| -5    | 坏       | 14.4 × ?               | 青灰色         | 密       | 良好 | 1/5。                       |
| -6    | 坏       | ? × ?                  | 燈褐色         | 密       | 普通 | 時計。底完形。静止糸切。               |
| -7    | 坏       | 12.2 × 5.0             | 赤褐色         | 密       | 良好 | 時計。ほぼ完形。静止糸切。              |
| -8    | 坏       | ? × ?                  | 黃褐色         | 密       | 普通 | 時計。土師質。器形不明。               |
| 図29-1 | 坏       | 11.3 × 3.8             | 暗灰色         | 粗       | 普通 | 時計。1/3強。全体に丁寧。焼けひずみ有り。     |
| -2    | 蓋       | 12.2 × 4.1             | 暗青色         | 密       | 良好 | 半分現存。                      |
| -3    | 壺       | 8.4 × 14.0             | 濃灰色         | 密       | 良好 | 時計。1/2強。                   |
| -4    | 坏       | (11.0) × (5.1)         | 暗灰色         | 粗       | 良好 | 時計。1/2。                    |
| -5    | 坏       | 12.3 × 5.0             | 青灰色         | 密       | 良好 | 時計。                        |
| -8    | 甕       | 29.4 × ?               | 綠灰色         | 密       | 良好 | 反時計。                       |

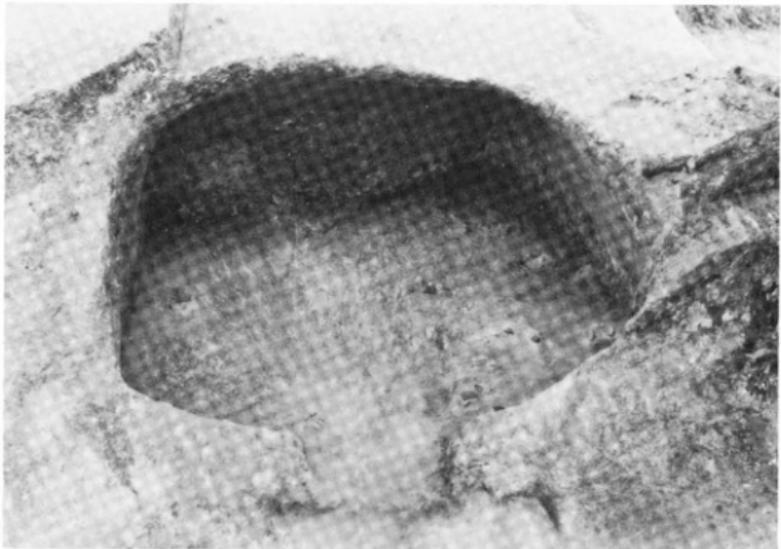
# 図 版



松田谷横穴群 II 群全景（北から）



松田谷横穴群 II 群 3 号穴全景

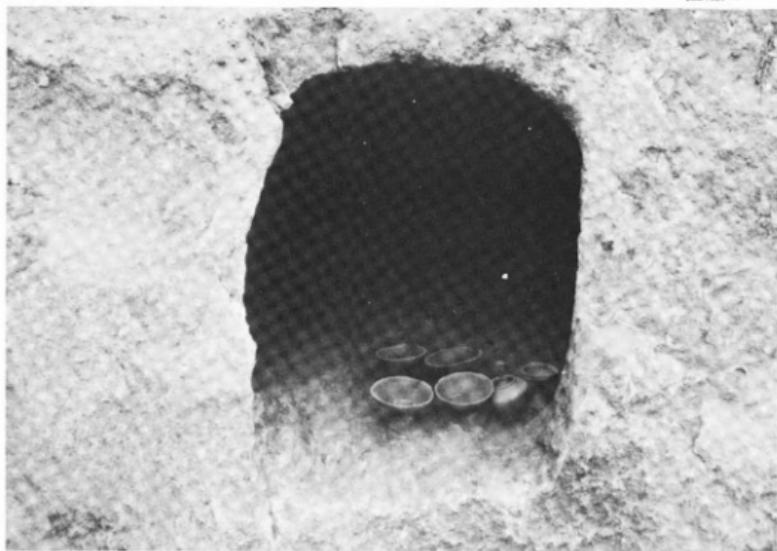


松田谷横穴群Ⅱ群4号穴全景

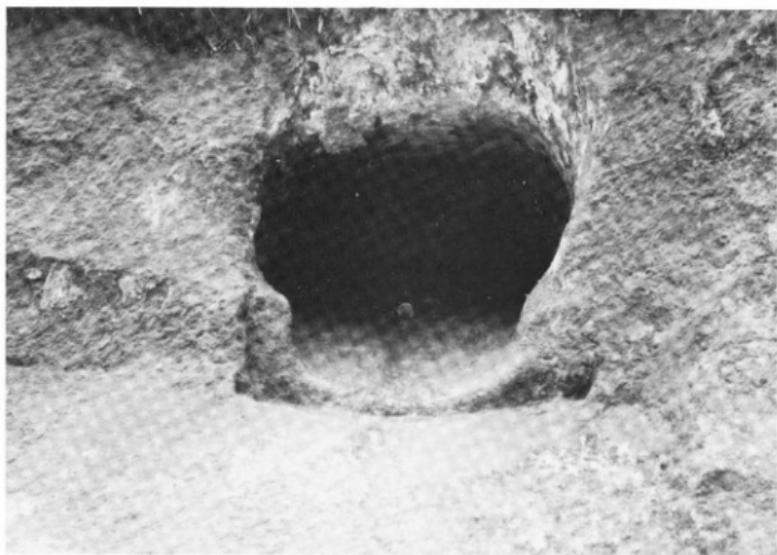


松田谷横穴群Ⅱ群5号穴全景

図版 3



松田谷横穴群Ⅱ群6号穴全景



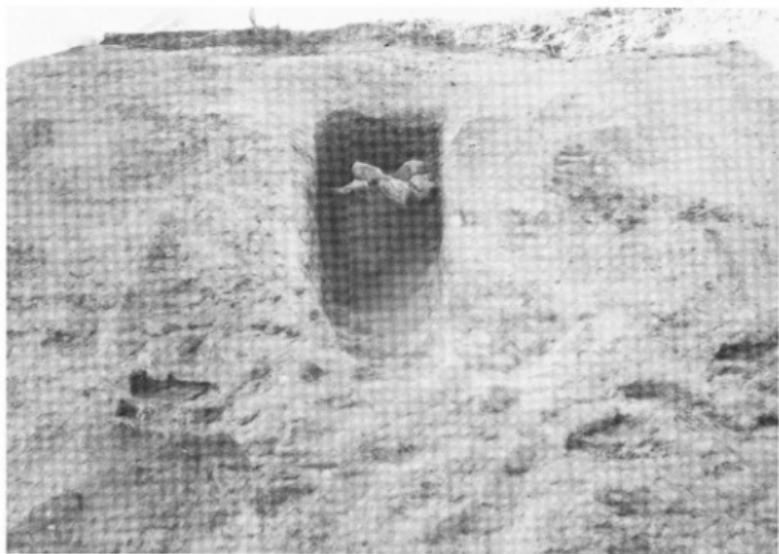
松田谷横穴群Ⅱ群7号穴全景



松田谷横穴群Ⅲ群全景（南から）



松田谷横穴群Ⅲ群1号穴全景



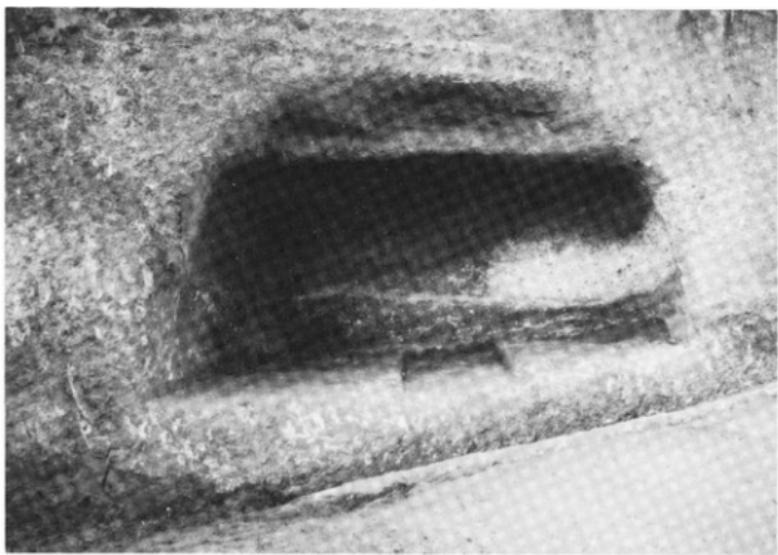
松田谷横穴群Ⅱ群 2号穴全景



松田谷横穴群Ⅰ群 5号穴全景

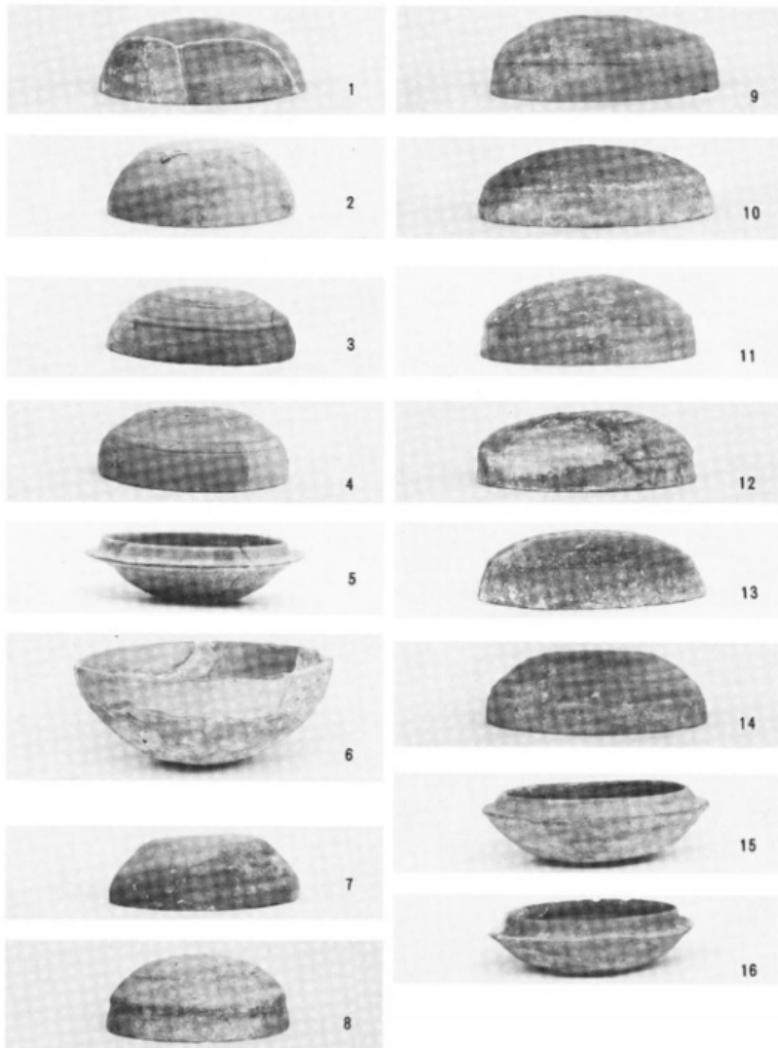


松田谷横穴群Ⅳ群全景（南から）



松田谷横穴群Ⅳ群 1号穴全景

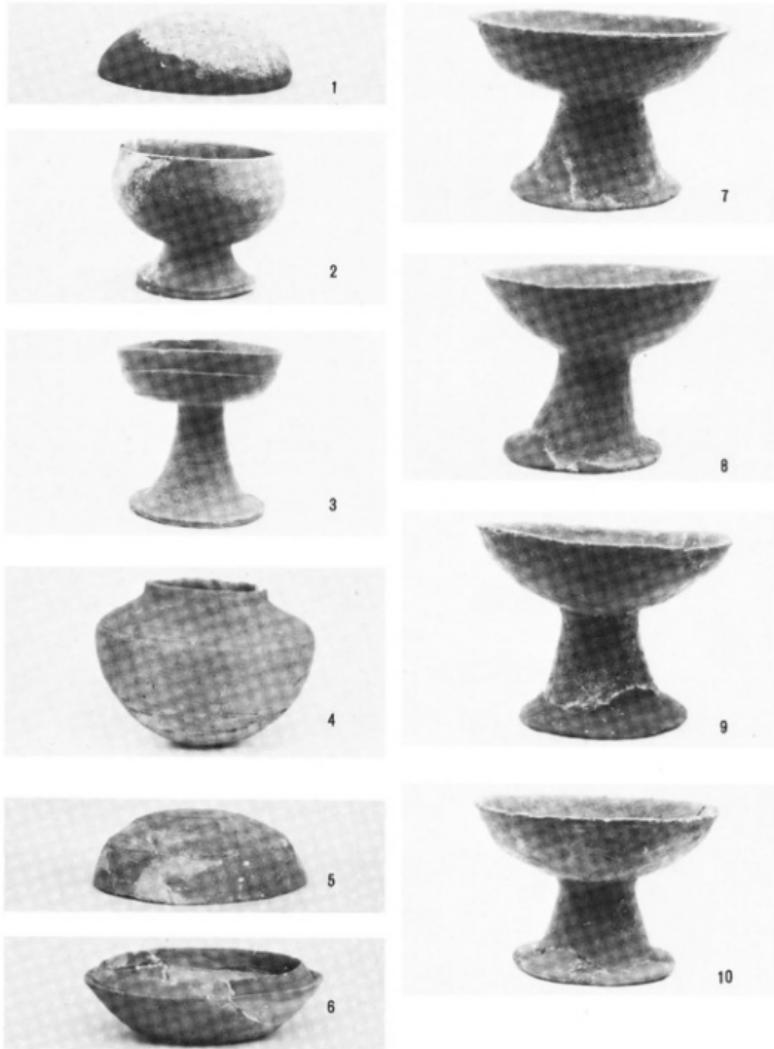
図版 7



・Ⅲ群3号穴出土土器(1・2)

・Ⅲ群4号穴出土土器(3~6)

・Ⅲ群5号穴出土土器(7~16)



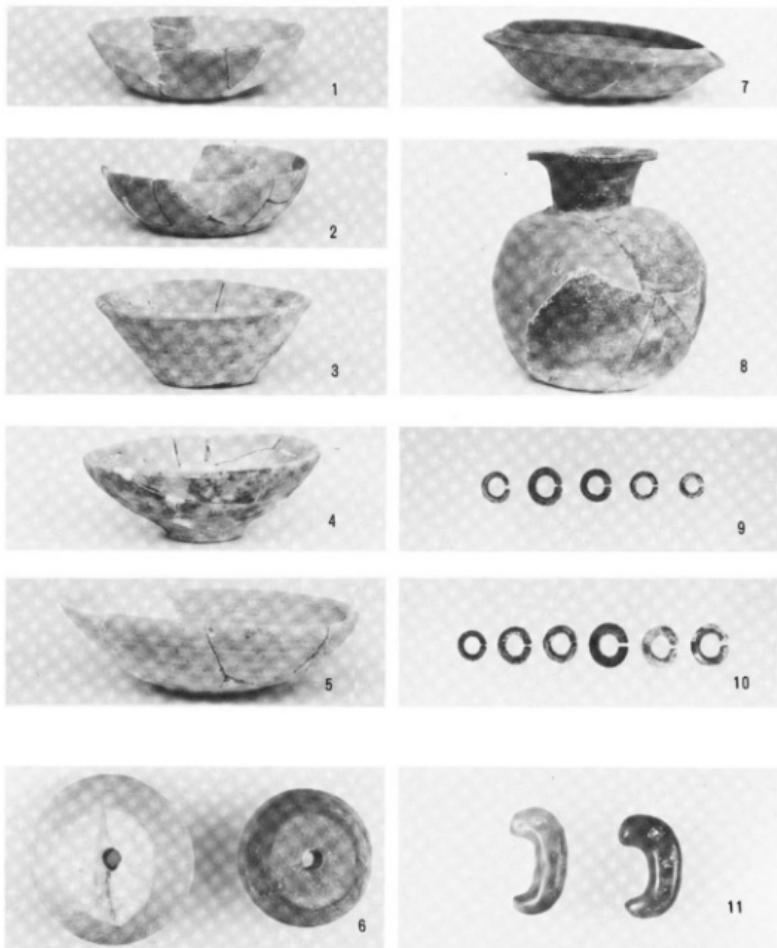
• II群7号穴出土土器(1・2)

• II群6号穴出土土器(3・4)

• III群1号穴出土土器(5・6)

• II群6号穴出土土器(7~10)

図版 9



- ・II群3号穴出土土師質土器(1・2)
- ・II群1号穴出土土師質土器(3)
- ・II群4号穴出土土師質土器(4・5)
- ・紡錘車(6左 II群4号穴、右 II群3号穴)

- ・表 探 土 器(7・8)
- ・出 土 耳 環(9・10)
- ・出土勾玉(11左 II群4号穴、右 II群3号穴)

1982年3月

編集・発行：島根県教育委員会

印 刷：黒 潮 社